MONTO

岩手県立大学総合政策学部ニュース●第25号　2011.4.6
《総合政策学部 HP》http://www-poly.iwate-pu.ac.jp/

特集●学生に聞く授業・カリキュラム

大学正門付近から見る県大シンボルツリーと姫神山

ウィンターセッション

ウィンターセッション

アロニア福田パン販売風景

東南アジアの知識人との交流

東南アジアの知識人との交流

アロニア福田パン販売風景

IPU地域連携フォーラム

カラマツ並木の冬景色

学部棟から見る秋の夕焼け

CONTENTS

特集●学生に聞く 授業・カリキュラム
おじゃします
　吉本繁壽ゼミ／見市建ゼミ
New Intelligence
　茅野恒秀 講師
研究最前線
　村木尚文
学部ニュース
　アロニア福田パンについて
　東南アジアの知識人との交流
　クロスロードで総合政策学部を体験！
　就職状況
　人事異動
風のモント達
情報数理と政策②
　「総合政策」の空白を埋める試み
新入生・在学生の皆さんへ
岩手の地形②
　「花崗岩の街　盛岡」

特集●学生に聞く 授業・カリキュラム

学生は授業やカリキュラムをどう認識しているのか？ 何を期待しているのか？ また、学生の学外活動に大学がどんな手助けができるのか？ というテーマで懇談会を行いました。普段はなかなか聞けない学生の本音・意見を聞くことができました。

●学生参加メンバー
大槻　麗奈（4年・島田ゼミ）
佐々木健聖（4年・高嶋ゼミ）
奥寺　麻衣（3年・小井田ゼミ）
菊池　貴行（3年・小井田ゼミ）
高橋　美紀（3年・岡田ゼミ）
高橋　裕太（3年・小井田ゼミ）
高橋　庸一（3年・高嶋ゼミ）
舘崎　祥枝（3年・佐藤ゼミ）
佐々木美南子（2年・環境・地域コース）
佐藤　凌太（1年）
野中　里菜（1年）
司会／高嶋　裕一（本学部准教授）

高嶋　皆さん、お集まりいただきありがとうございます。学部のカリキュラムについて意見を聞かせてもらうため、こういう企画を今回催しました。

学部カリキュラムについて

●履修登録単位数の制限

高嶋　まず単位の※履修登録単位の制限という話から。一・二年生が、ちょうどそれにあたっているので、そのあたりから聞いていこうと思います。大変だった？

※履修登録単位制限　現在の二年生から、一・二年次は各学期二四単位以内、三・四年次は各学期三〇単位以内。ただし教職関連科目は除く。

佐々木美　まったく大変ではなかったです。まわりには大学に来ない日を作ってアルバイトをしている人もいます。私は二年間で、あと三一※単位取れば卒業できるという状況なので、みんなと「何のために単位制限あるんだろう？」と話していました。

※単位　週一回の授業を一五回受けると二単位となる（卒論は三単位）。この場合は二年間で一四の授業を取れば卒業できることになる。

左：野中さん（1年）
右：佐々木美南子さん（2年）

野中　私は※教職を取りたいのですが、制限以上に取りたい科目があったので、制限がなかったほうが良かったなと思いました。

また三年生になってコースや講座が分かれる時に参考にするために※基幹科目になっている科目はすべて受けたいと思っていたのですが、受けられなかったことが残念です。

※教職　「教育職員免許状」のこと。将来教員になろうとする学生向けに、必要単位の履修や教育実習を行うことで取得できる資格。本学部では中学校社会、高校地歴・公民の免許状が取得できる。

※基幹科目　様々な分野の基幹的な事柄を学ぶための科目。

高橋裕　一・二年の間に、いろんな分野に触れたことが、非常に良い経験になりました。その経験によって三・四年になって、本当にやりたいことが見えてくると思います。

高橋庸　一・二年は多少きつくてもいっぱい取っておけば、三年生で就活の準備の時間や卒論など、やりたいことを行えるための時間が増えるのではないかと思います。

高橋美　先生方の話を聞くと、三・四年生の時に大学に来ないことを懸念されていると感じるのですが、制限を設けるとかではなく、自分のやりたいことを探せるように、道しるべとなるものを用意したほうが有効なのではないかと思います。

●カリキュラムと資格

高嶋　次に学部カリキュラムと資格との関係についてはいかがですか。

大槻　みんなそれほど資格は意識していないようでした。私は意識していて、取れるものは取っておこうと思っていました。

大槻さん（4年）

佐々木健　僕も社会調査士を取りました。就職を意識していて、何か取っておこうという感じでした。

あとは独学で簿記などを取りました。資格は自分で取るものだと思うので、あんまり意識することでもないと思います。

奥寺　目的に向かって資格を取ろうという方針を明確にして、カリキュラムを作るなら良いですが、ただやみくもに資格を取りたいからというので、カリキュラムを組むっていうのは、本末転倒というか、あまり意味がないのではないかなと思いました。

菊池　まずは自分が何になりたいのかっていうイメージを明確化して、その上でこういう資格が取れるよ、と提示していったほうが良いのかなと思います。

野中　総合政策学部は幅広くできる学部だと思うので、資格を取れる範

左：佐藤さん（1年）
右：佐々木健聖さん（4年）

おじゃまします 吉本繁壽ゼミ

縦横無尽な会話こそ問題発見への足がかり

「○○って、知ってる？」―さまざまな話題が議論を呼び、理解へとつながっていく。吉本ゼミのディスカッションにあらすじは存在しない。「問題を発見するのが本学部の基軸だと思っているので、アプローチは同じでも、違うテーマのヒントになる」と吉本教授はいう。研究室は、興味と問題意識を刺激する空間だ。

吉本教授はメディア論の専門家。「学問として体系化されていない分、何でもできる」と、まずは学生自身に興味分野のリサーチを求める。四年生の小野千尋さん、新野真明子さん、藤原絢子さん、前東知里さんらはミクシィからネットオークション等々、それぞれのテーマで研究を進めており、三年生の小山田和輝さん、兼平知美さん、佐藤瞳さん、藤村秀輝さんらはテーマ探しの真っ最中。テレビCM、iPad、ご当地ゆるキャラ…一見とりとめなく聞こえる会話も、情報の宝庫である。

「先生自身が知識のるつぼ」―そのひと言に残りのメンバーも大きく頷く。知識は並べ立てるのではなく、興味を研究という「形」にするために必要なもの。その過程を学生と一緒に考えていくのが吉本教授。何より「私自身がしゃべりたいから」と、ディスカッションはさらに縦横無尽に広がっていくのであった。

囲を広げて欲しいと思います。

それから、教職の科目は社会科だけでなく、全般的に取れるようにしてくれたら良かったと思っています。

学外・授業外活動

高嶋　学外、授業外で、皆さんがどんな活動をしたいのか、またそれに対して大学・学部がどう手助けができるのかを、お聞かせください。

高橋裕　何かやろうと思ったときに相談できる場所や、学生と教員を入れて話す機会・場っていうのが欲しいなって思っています。あとは学校からも機会の提供のようなもの、例えば学生が関わっていけるようなプロジェクトなどを学生に斡旋して、学生を巻き込むような活動を進めていっても良いのかなと思います。

菊池　活動をするうえで、学部の中でも相談できたり、そこだけで解決できないような問題だったら他学部に気軽に話を聞きに行ける環境があったら良いと思います。

佐藤　いま滝沢村で「安心安全の会」に入っていて、いろいろ地域の安全について考えているのですが、先生たちに困ったときに気軽に相談に行ければなと思います。

奥寺　いろいろと活動されている方がいると思うので、活動していることを発表する場が欲しいと思います。例えば、ホームページやブログなどもあると思います。

高橋美　私はあるNPO法人の理事をやっているのですが、新人生に直接声をかける場があまりないので、そういう場所があればぜひ行きたいです。

高橋裕太さん（3年）

左：舘崎さん（3年）　右：高橋美紀さん（3年）

高嶋　何かイベントがある場合には学部ホームページで、宣伝できますよ。

舘崎　最初のうちは先生方が提示してくださると、一歩踏み出しやすいのかなと思います。

それから、ホームページだと見る人が限られるので、学内に掲示できる場所や、報告できる場所があれば、より目につきやすくて良いと思います。

高嶋　学部棟の一階の廊下にある掲示パネルが、実はそういう場ですが、活用されてないですね。それを活性化しないとマズイですね。

大槻　私も他大学と一緒に活動したことがあるのですが、そのときに資金のことで困りました。そういう仕組みがあると良いと感じました。

高嶋　活動していくと、自分たちの代で終わっちゃうっていうパターンが結構多いよね。何とか、縦のつながりっていうのができるといいなと思っています。

大学内・学部内の交流・連帯

佐々木美　県大ってあまりつながりがないので、つながりを作る場があればいいのにと思っていました。それで他の学部の人たちと話し合える、しゃべり場みたいな場所を作ろうという話が出ています。

野中　一年生は同じ学部の先輩に聞きたいことが、いっぱいあるんですけど、交流の場がないから聞けないっていうことが多々ありました。交流する会や場ができればいいなと思います。

菊池　立派なラウンジが二階や三階にあるじゃないですか。それを使ってもいいんじゃないかと思います。

高嶋　確かにそうですね。ラウンジに衝立があるだけでも良くなりますよね。

奥寺　学部間で連帯を持つために、率先するべきなのは総合政策だと思うので、私たちから他の学部の人たちに何か発信できるようなシステムがあっても良いと思います。総合政策の先生方も大学全体をまとめていく役割を持ってもいいのかな、っていうふうに思いました。

高嶋　総合政策ならでは、ということで専門家を束ねる役割を本当はしないといけないところもありますね。重要な課題だと思います。

それでは時間となってしまいました。今日は皆さん本当にいろいろな意見を聞かせてくれて、ありがとうございました。

左：奥寺さん（3年）　右：菊池さん（3年）

懇談会を終えて

学部のカリキュラムについて、学生と教員が話し合う機会を設けるのは実は開学以来初めてのことです。大学が良かれと思ってやっていることも、学生の視点からはかなり違って見えるのだな、と反省するところが多かったように思います。履修登録単位制限でも、単位で誘導するばかりではなく、進路の道標を作っていくことが大切ということに気づかされました。

資格対応についても、形式的に行うのではなく、学生が自らチャレンジしたくなるような環境づくりが重要で、またそうでなければ資格取得の意味もないのだということは、学生の皆さんもよく考えているなあ、と思いました。

また、学生の皆さんの要望の中にも、大学を良くしていこうという意識が読み取れて、とても心強く感じました。特に総合政策学部が県立大学全体をまとめていくべし、という提言は、私自身の日ごろの活動を振り返って、これでいいのか、という思いを強くしました。

このような懇談機会を継続することによって、少しずつ良い方向につなげていくことが真の大学改革になるのではないかなと思います。

高橋庸一さん（3年）

おじゃまします

見市 建ゼミ

書物やメディア活用で国際的な視野を養う

「世の中の事柄で国際的でないものはない」。インドネシアを中心としたイスラーム政治運動や社会現象を研究する一方、授業ではより広範な国際関係論を展開する見市建准教授。日本文学しかり、流行のポップカルチャーもその例外ではなく「自分の本当にやりたいことを伝えた」と話す四年生の杉浦優美さんはじめ、各自のテーマはバラエティに富む。この日は所属する一〇人のうち四年の菊池祐太さん、畠山洸亨さん、三年の齋藤みな美さん、高橋千尋さん、松本明華さんが演習に参加した。

見市ゼミではまず、興味分野のヒアリングののち三冊程度の本が渡される。その発表をくり返し、読む・書く・話すの基本を身につけつつ、テーマの絞り込みを促すのだ。

だが「読解以外の頭の体操も必要」と、合間には先生所蔵の映画を鑑賞し、二年前からツイッターを利用した情報交換も行っている。こうしたメディアを駆使する一方、大学祭にフェアトレード・カフェを出店、いろいろな事情を抱えた国のコーヒーを提供し、外国への関心を喚起する活動も行う。これらの多彩な経験もまた、国際的視野を培う一助になる。

「見市ゼミは全員が違うテーマに取り組んでいる」と齋藤さん。なるほど、ゼミもひとつの国際社会なのだ。

NEW Intelligence

研究者と環境ＮＧＯを経験。広い視野から環境社会学をとらえる

茅野恒秀講師

◆プロフィール
法政大学社会学部社会政策科学科、法政大学大学院社会科学研究科出身。大学入学とほぼ同時に日本自然保護協会に入会、事務局ボランティアをしながら自然保護運動の研究を行う。大学院博士後期課程時に「赤谷プロジェクト」に参加。自然保護や生物多様性に関する現場の問題と政策、エネルギー政策などを研究テーマとする。

「いつも現実の問題解決の役に立ちたいと思ってきました」。環境社会学の専門家として、自らの研究姿勢を明確に語る茅野恒秀講師。

昨年四月に県立大に赴任するまで勤務していたのは財団法人日本自然保護協会だが、母校の法政大学大学院での研究生活も続けていた。「研究者であり当事者でもあったから、物事を動かしながら調査・分析を行う『アクション・リサーチ』に取り組めた。環境社会学者としても大きかった」。環境問題や自然保護、そしてエネルギー政策…茅野講師が取り組んできた研究に共通する、リアルな現場感覚のゆえんである。

研究者とＮＧＯ。二足のわらじのきっかけは、中学時代にまでさかのぼる。自治体の海外派遣事業で見聞した欧州で環境問題とＮＧＯの役割に興味を持ち、高校の時に環境社会学の名著『新幹線公害』を読み、著者のいる法政大社会学部へ進学した。ＮＧＯとの関わりは、高校の恩師が日本自然保護協会の関係者だったことから。事務局ボランティアから始め、非常勤職員となり協会の創立五〇周年記念誌を編纂した。

なにより得難い経験は「赤谷プロジェクト」への参加という。群馬県みなかみ町にある赤谷の森の生物多様性復元を目指し、林野庁関東森林管理局と日本自然保護協会、地域住民を主にした赤谷プロジェクト地域協議会の三者による共同管理事業は前代未聞であり、林野庁と協会の「歴史的和解」とも評された。その実務者として一年の三分の一を現地で過ごし、霞ヶ関などあらゆる組織と折衝を行った茅野講師。「自然保護の枠組みだけで地域は捉えられない。経済や産業、教育や行政の在り方などさまざまな課題を重ね、解決の方向を探っていくことの重要性を実感した」と振り返る。今も研究者として関わっており「むしろ、これからが勝負」と、この先の森林計画と協働の行く末を見つめている。

新天地岩手でも精力的に動いている。自然エネルギー調査で三年前から訪れていた葛巻町では、エネルギー政策と地域社会の関わりを探る研究をスタート。「地域資源の活用を受け入れた住民のモチベーションに興味がある」という。これに相対するのが九年前から取り組む青森県六ヶ所村での地域調査で、「環境破壊への懸念と経済貢献への期待。日本社会を考える上で六ヶ所の問題は避けて通れない」と茅野講師。全く様相の異なるエネルギー政策が、同じ東北で展開されていることに「研究課題はきわめて重い」という。また、紫波町で太陽光など自然エネルギーシステム普及を促進する会社が地元の出資で設立されたことも、研究者として大いに刺激される動き。「自然エネルギーへの転換が遅れ気味の日本で、紫波の試みは小さいながらも日本のトップランナーといえる。事業を手伝いながら調査をしたい」と意欲を見せる。

「出会いは待っていても来ない」。海外派遣、大学とＮＧＯの両立。自らの行動の結果得られた体験を重ね、茅野講師は語りかける。シンポジウムや講演会などなんでもいい、普段とは違う場所の中で自ら「問題」に気づくことが大事という。そのために利用すべき場所が大学だ。

「研究、調査、問題の見つけ方も大学で学べる。学生と教員の距離が近しい県立大の利点を生かし、是非ここに来て話をしてほしいですね」。

学部ニュース

アロニア福田パンについて

ふくだぱんだウェブサイト
http://fukudapanda.blog61.fc2.com/

私が担当するゼミ（専門演習）のメンバーで、盛岡の特産品のアロニアと県内で広く親しまれている福田パンを組み合わせた「アロニア福田パン」の企画・販売を行った。

まず、このような商品が生まれるきっかけとなったのは、ゼミの課外活動として二〇〇八年に始めたブログ「ふくだぱんだ」である。当初は福田パンのレビューを中心に更新していたが、二〇一〇年に入ったゼミ生の発案で、ツイッターの利用を開始したところ、盛岡手づくり村の方からアロニアを使った商品企画のヒントをいただいた。

七月頃からゼミ内・学内での試食を経て企画書を作成し、九月に福田パンへの企画書を持ち込んだところ、快く了承をいただき「アロニア福田パン」の販売が正式に決まった。

一〇月にはいわて盛岡食文化フェア、盛岡農業まつり、岩手県立大学大学祭の計三回・七日間の販売を行い、合計で二三〇〇個を完売する好評となった。また、滝沢村のご厚意で、一一月に東京で開催されたたきざわ観光物産展の一環として、約五〇〇個を販売させていただいた。さらに、一一月の土日祝日限定ではあるが福田パン店頭で販売されたほか、二月の手づくり村のイベントや楽天市場などでの販売も行われた。

アロニア福田パンサンプル制作中のひとコマ

これらの活動に関して、以下の三点を強調したい。まず、活動の継続性である。ブログを開設したのは二年前であったが、それを一過性のものとせず、活動を継続したことがこのような成果につながったと考えられる。

次に、学生の自主性を挙げたい。ブログ開設時から学生自身で企画することを重視し、教員はあくまでも脇役に徹したが、このことで、学生自身の創意工夫が引き出され、より積極的な活動につながったと思われる。

最後に、大学での学習内容との関連を挙げたい。私のゼミでは英語の経済学の教科書の輪読を中心に行っており、直接的には今回の活動には関係ないが、企画や販売の際に経済学・経営学や社会調査の背景知識が生きる場面もあり、基礎的な知識が実践として生きる貴重な機会になったと評価している。

今後も同様の機会があれば、ゼミ生と一緒に取り組んでいきたい。

（小井田伸雄／本学部准教授・ゲーム理論）

アロニア福田パン販売風景

研究最前線

奇妙な確率論の研究 —— 非可換確率論

村木 尚文

私が研究しているのは、非可換確率論と呼ばれる数学の一分野です（これは、量子確率論とも呼ばれます）。確率論の前に「非可換」という形容詞が付いています。まず、このことについて説明しましょう。

量子力学はミクロの世界を記述するために生まれた理論ですが、それは「観測されるまではその値が不確定であるような量」を扱う理論であり、従って、ある種の確率論的な理論です。ただし、通常の確率論と大きく異なる点は、偶然量Xというものを作用素という数学概念を用いてモデル化するというところです。作用素とは、ある種の拡張された数概念です。作用素と数との大きな違いは、作用素の場合は、掛け算（＝積）については、掛ける順序によって演算結果が一般には異なってしまう（XY≠YX）という点にあります。つまり、作用素の積演算は、一般には「交換不可能」（＝「非可換」）なのです。量子力学においては、古典的な世界観からみると、矛盾としか思えないような不思議な現象がいろいろ現れます（興味のある方は、講談社のブルーバックス・シリーズの啓蒙書等をご覧ください）が、このことの原因は量の体系が可換ではない点にあるのです。

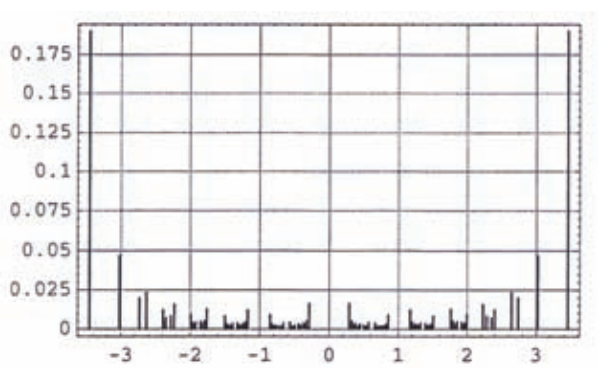
このような可換ではない量体系に対する‘確率論’が非可換確率論です。非可換確率論においては、量体系の非可換性に由来して、いろいろ不思議な事態が生じます。その一つがいわば‘非コルモゴロフ確率論’の存在です。これを非ユークリッド幾何学に喩えて説明しましょう。

幾何学の領域においては、紀元前のユークリッドによる幾何学の公理化以来、約2000年間にわたって、ユークリッド幾何学が唯一の幾何学であると信じられてきました。ユークリッド幾何学は、われわれが学校で学ぶ幾何学であり、例えば「三角の内角の和は２直角（＝180°）である」などの‘常識’的な定理が成り立ちます。ところが、19世紀になって、３人の数学者 ロバチェフスキー（ロシア）、ボリャイ（ハンガリー）、ガウス（ドイツ）が、非ユークリッド幾何学というものを発見してしまいました。この奇妙な幾何学においては「三角形の内角の和は180°より小さい」などの奇妙な定理が成り立ちますが、体系全体としての矛盾はなく、ユークリッド幾何学に平行したかたちで、非ユークリッド幾何学が成立します（非ユークリッド幾何学は、相対論や宇宙論で使われます）。

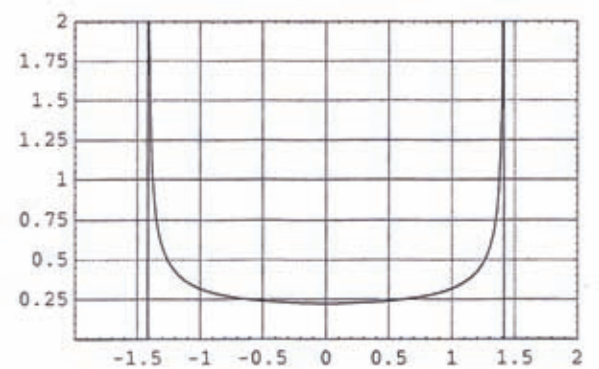
これと類似のことが非可換確率論でも生じたのです。伝統的な確率論は17世紀頃に誕生し、20世紀前半にコルモゴロフ（ロシア）によって厳密な公理的体系として基礎づけられました。例えば、古典確率論の有名な定理としては「独立な微小な誤差が無数に積み重なると、その分布は釣鐘状の形（ガウス分布）に近づいて行く」という、中心極限定理と呼ばれる定理があります。しばらくの間は、確率論とは、唯一つの理論（＝コルモゴロフ確率論）を指していました（ちょうど、幾何学とはユークリッド幾何学しかないと思われていたように）。しかし、非可換な量体系を対象にした場合、非コルモゴロフ的な確率論が存在しうることが1980年代にヴォイクレスク（ルーマニア）によって発見されました。それが、自由確率論と呼ばれる新種の確率論です。自由確率論においては、「‘独立’な微小な誤差が無数に積み重なると、その分布は半円形（ウィグナー半円分布）に近づいて行く」という、奇妙な定理（自由中心極限定理）が成立します。

私はこの事実に触発されて、2000年頃、別の新種の‘確率論’（＝単調確率論）を発見しました。単調確率論においては「‘独立’な微小な誤差が無数に積み重なると、その分布は角が２本ある形の分布（逆正弦分布）に近づいて行く」という、奇妙な定理（単調中心極限定理）が成り立ちます。現在、この続きの研究を行っています。

（本学部教授・函数解析学）



単調確率論における‘二項分布’（７回のコイン投げの結果）



逆正弦分布のグラフ

東南アジアの知識人との交流

国際交流基金の招きで来日した東南アジア五カ国のイスラム知識人が来学し、共同セミナーを行いました。

まず桒田准教授が「地方経済・社会の疲弊と再生」と題して講義を行い、桒田ゼミの三年生が学生による取り組みを紹介しました。続いて見市が「ムスリムの居住から見た日本の地方」、フィリピンのジャハネ・ムティンさんが「ミンダナオにおける紛争と平和」と題して、それぞれ講義をしました。

本学教員の講義には東南アジアの参加者から数多くの質問が寄せられ、日本と東南アジア各国の事例について活発な議論がなされました。フィリピンの紛争はわれわれの日常からは縁遠い話題のようですが、日本政府は重要な役割を果たしています。本学の学生からの鋭い質問に、参加者が感嘆する場面もありました。

昼休みにはともに大学生協で食事をとり、イスラム教徒の食習慣について学ぶなど、教室の内外で交流を行いました。

（見市建／本学部准教授・国際関係論）

交流の様子

クロスロードで総合政策学部を体験！

二〇一〇年一二月二五日と二六日にウィンターセッションがありました。これは岩手県内の参加を希望した高校生が大学にやってきて、大学での勉強の一端を体験するもので、毎年、クリスマスの時季に実施されています。

今回の本学部のタイトルは「社会におけるジレンマ問題を考えよう～カードゲーム教材「クロスロード」を使って～」としました。三四名の高校生が参加しました。

「クロスロード」は阪神・淡路大震災を様々な立場で経験された方々のインタビューをもとに、災害時に直面する様々なジレンマをカードゲームの形で表現したものです。ゲームのルールは、矛盾した二つの選択肢に対し、ゲームプレーヤーが「イエス」か「ノー」で意思表示をし、それと同時に自らの意見を出し合います。プレーヤーはそこで自らの考えと被災者を重ね合わせることで、バーチャルに災害を経験することができます。

一日目の授業では、伊藤准教授（専門…火山学）からクロスロード（一般編）を使って、高校生の皆さんに「クロスロード」を体験してもらいつつ、ジレンマ問題について解説しました。

一日目「クロスロード」を体験する

二日目はまず、法学と経済学の分野における社会的ジレンマについて、窪准教授（専門…民法）と小井田准教授（専門…ゲーム理論）から、それぞれ講義が行われました。

その後、六つの班に分かれて「クロスロード」の問題を高校生に考えてもらう演習を行いました。講義をした二人の教員がクロスロードの問題作成に向いていそうな新聞記事を用意して、それをもとに各班で話し合って問題を作りました。

作成された問題は「レストランの禁煙化の是非」―健康増進とタバコ産業―、「残業を社員に命ずるか」―会社経営と従業員の健康―などがあり、みんなの前で発表をして、教員から講評を受けました。

今回のウィンターセッションでは、意思決定に際して複数の立場を想定することを経験してもらいました。これは社会問題の解決に必須のものです。ぜひとも、この経験を今後に生かしてもらえればと思っています。

毎年このような試みが行われています。興味を持たれた高校生の方は、ぜひ参加して総合政策学部を感じてください。

（高大連携グループ）

「クロスロード」の問題づくり

就職状況

平成二二年度の就職戦線は、昨年に引き続き不況の影響を受け、年度当初から立ち上がりの遅いものでありました。四月、五月までに決まっていなかった学生が秋以降もなかなか内定を取れない状況が続き、昨年よりいっそう厳しいものでした。平成二三年三月末現在、本学部四年生の就職希望者九五名中八三名が内定しており、内定率は、八七・四％となっています。

大手では、ＪＲ東日本、日本通運、ファミリーマート、リコージャパン、ジュピターテレコムなどに決まっています。県内の企業では、岩手銀行、北日本銀行、東北銀行、北上信用金庫、ＩＢＣ岩手放送、岩手朝日テレビ、川徳、薬王堂などに採用されています。

業種別では、金融・保険業が一七名で最多となっています。以下、卸売・小売業一三名、公務員一一名、運輸・郵便業七名、製造業、サービス業、複合サービス業が各々六名と続きます。

二三年度の就職活動は既に始まっていますが、不況に加え震災の影響もあり、県内の企業だけでなく、一部大手においても採用を控えるなど、いっそうの厳しさが続いています。

（就職委員会）

●業種別の就職内定状況
平成23年3月31日現在

業　種	就職者数
建設業	5
製造業	6
電気業	1
情報通信業	5
運輸・郵便業	7
卸売・小売業	13
金融・保険業	17
不動産業	1
サービス業	6
飲食・宿泊業	3
医療・保健衛生	1
福祉・介護	1
複合サービス業	6
公務	11
合　計	83

人事異動

転出者（3月31日付）

氏　名	種別	職　名	転出先・備考
小地沢麻樹	退職	実習助手	岩手医科大学
福田さゆり	退職	学部事務	－

採用・昇格者（4月1日付）

氏　名	種別	職　名	前　職	分　野
辻　盛生	採用	講　師	小岩井農牧環境緑化部	水圏環境システム論
鈴木　正貴	採用	助　教	福井県土地改良事業団体連合会事業部	農村環境計画論
斎藤千加子	昇格	教　授	本学部准教授	行政法
高嶋　裕一	昇格	教　授	本学部准教授	公益事業論
佐野　嘉彦	昇格	教　授	本学部准教授	環境科学
宇佐美誠史	昇格	助　教	本学部助手	交通工学
伊藤　明奈	採用	学部事務	－	－

風のモント達

学生の企画による就活セミナー開催。仲間との絆、将来の夢を見つけた

3年　氏原史恵さん

大学生が主体となって全国各地で開催されている就活セミナー「就活サプリ塾」。県立大では初めてとなるセミナーの学生スタッフ代表として、氏原史恵さんは奮闘した。「自分自身も就活がよく分からなかったから、まずは自分のためになるかなと思って」。気軽な気持ちで始めたものの、立ち上げまではなかなか大変だったようだ。

9月下旬、大学生協による説明会に訪れたのは、氏原さんと友人の2人だけ。そこで信頼できる先輩に声をかけ、まずは3人でスタッフ集めに取り組んだ。友人や知人への声かけはもちろん、学部内の1、2年生への宣伝も。セミナーのレジュメを作り、パワーポイントを使ったプレゼンテーションを行ったという。「宣伝の仕方について先生からアドバイスをもらい、就職課の協力もあったからできた」と振り返る。こうして学年を超えて集まったスタッフとミーティングを行い、セミナーの方向性を決めた時点で、開催日まで残り1カ月。しかし仲間と協力し、わずか3週間で企画内容をまとめあげた。「もともと企画を立てるのは得意だし、短期間で出来る限りのことをやろうと思っていたんです」と氏原さんはいう。休日返上で準備に取り組んだ仲間の存在も大きかった。「自分たちの就活のきっかけにもなるように、人数よりも中身を充実させよう」。仲間のテーマを掲げて迎えた就活サプリ塾には70人もの学生が参加、企業の人事担当者とざっくばらんな雰囲気の中でコミュニケーションを図った。懇親会では参加した学生からスタッフへの感謝の言葉があり、「うれし泣きしました」と氏原さんは笑う。

活動で得たものは多い。1つは多くの仲間との出会い、2つめは物事をやり遂げる集中力と根気。リーダーとして異なる意見をまとめる難しさも痛感したが、「その分の達成感が病みつきになってます」とニッコリ。何よりの収穫は、将来の夢をみつけられたこと。「自分の立てた企画を通し、人のために役に立てるような仕事がしたいと思うようになった」という。氏原さんの前に、次のチャレンジへのレールはもう敷かれている。

NPOに参加して取り組む地域活動。動くこと、つながることの楽しさを実感

3年　高橋美紀さん

高校生の時から「世の中を見られるような活動がしたい」と考えていた高橋美紀さん。1通のメールをきっかけに、特定非営利活動（NPO）法人学生ビジニティいわてに参加した。「学生が主体的に動き、自治体や企業と連携できることに魅力を感じた。最初の説明会で参加を決めました」。即断即決の行動力は、そのまま活動へと向かった。

学生ビジニティいわてでは、自治体・企業等から相談された課題や、自分たちから自治体・企業等に持ちかけた企画を、学生会員が事業として企画立案を行い、実行していく。このNPOは「自分たちがやりたいこと、社会人になって何をしたいのか？　そんな悩みを解決するための『自分探し』ができる場所がコンセプトになっている」と高橋さん。

例えば昨年は、雫石を拠点にした首都圏の大学生向けモニターツアーを企画。旅行業者ではなく、学生がガイド役を務めるという試みのため、2カ月近くをかけてリサーチを展開。「エコツアーに近い感覚でまとめた」旅程は、農業や産直体験ほか地元の起業家に話を聞くなど、大学生らしい視点も盛り込んだ。また昨年末には、花巻市東和町の空き家に仲間とともに1カ月暮らし、住み手の目線から町の魅力を情報発信。水が出ないハプニング、地域住民との交流など、大学ではできない経験もした。ほかにも、滝沢村のウェブ商店街の企画づくり等々、活動の話は尽きない。「参加することでいろいろな情報が得られ、つながっていく手応えがある。学生同士で意見を出し合い、みんなで企画を詰めていく時間がとても好き。私たち学生に協力してくれる大人がいてくれるのが心強い」。

大学では岡田ゼミに所属し、経営学や労務管理を勉強中。「NPOは私自身のスキルアップのためで、大学の勉強は労働者としてのリアルな現状を知るため。社会の中で好きなことをやっていくには、どうしたらいいのかが私の課題」と笑い、「あっ！　好きなことを仕事にするのではなく、プライベートな時間の中で好きなことをやっていくのも、アリか」と目を輝かせる。このしなやかな発想力が、高橋さん最大の武器だ。

情報数理と政策②
「総合政策」の空白を埋める試み

堀篭（ほりごめ）義裕

冒頭から脱線で恐縮ですが、私たちの体温が平熱より高い状態になる原因には、普通の風邪の他にも、インフルエンザや、体の中の特定の部分の炎症などいろいろ考えられます。発熱症状の原因が普通の風邪だと思い込んで市販の風邪薬を服用し続けても、本当の原因が腎炎なのであれば、症状は改善するどころか悪化します。

私たちが暮らす社会の問題も体の問題と同じで、原因をきちんと押さえなければ、適切な対処や、その結果としての解決も困難なはずです。体の問題解決を扱う医学は、対処の難しい病気の増加や技術の高度化などもあり、臓器別や病気別などでの細かい専門分化が進んでいます。しかしその一方で、近年は「総合診療（プライマリ・ケア）」の重要性が高まりつつあります。「何となく体の具合がおかしい」患者に対して、問診や検査などでその原因を多面的に探り、適切な対処（個別分野の専門医への紹介も含む）を行うことが総合診療では目指されています。専門の細分化や複雑な病気の増加に伴って、患者自身では原因がよく分からない（複雑な）問題に対して「原因をきちんと調べ、それに対し適切な対処を目指す」考え方が重視されつつあります。一方、それに対して社会問題を扱う分野はどうでしょうか？

社会問題を扱う学問には、法学、経済学、環境科学、社会学など多くのものがあります。これらは、いわば医学の臓器別や病気別の専門領域に相当するといえます。本学や他大学の総合政策学部は、基本的には社会問題の解決を扱うために関連する諸々の個別の学問を集めたものです。しかし、社会が高度化・複雑化してきているにもかかわらず、本学や他大学の「総合政策」学の現状を見る限り、医学の総合診療に相当する取り組みの重要性－とりわけ問題を洗い出すための、調査（問診）の組み立てや、数量データ（検査結果）の適切な解釈の重要性－が、ほとんど認識されていないのが現状です。「現状が何となくおかしいけど、何が原因なのかよく分からない」タイプの社会問題（「まちづくり」「地域活性化」はこのタイプといえるでしょう）に対して、現状の「総合政策」学には、個別専門分野の個別の解決法以前に、「問題の原因を分析的に見つける（定義づける）」考え方自体が希薄であり、ここに「学」として埋めるべき空白があるように思われます。

本学部には一応、社会問題の原因を把握する「問診」と関連する社会調査の講義・実習の科目や、数量データによる「検査」と関連する統計学などの情報数理の科目があります。しかし、社会調査に関しては、調査の技術的な方法の学習にとどまっているのが現状です。また、情報数理科目も、その多くは高校までの（受験）数学と同様に、与えられた問題の正解を得るための計算方法の学習にとどまっています。

既存の調査事例の批判的検討から、より適切な「問診」の組み立てを考える訓練や、自分が行った計算の意味や計算結果の解釈を考え、「検査」の結果から「問題を見つける」訓練の機会がほとんどないのが現状です。単にアンケートの調査票を作ってデータを集めるだけなら誰でもできますし、計算ができるだけの人は計算機で置き換えが可能な存在でしかありません。今後も増え続けるであろう「現状が何となくおかしいけど、何が原因なのかよく分からない」社会問題への対応能力、とりわけ「原因を分析的に見つける」力を鍛えることに関して、現状は極めて不十分です。ここに本学部の「総合政策」的な人材育成に関して埋めるべき空白があります。

これらの空白をいかに埋めるか。2011年度から新たに開講される学部講義科目「政策分析論」および大学院講義科目「政策分析研究」は、この問いに対する筆者なりの解を模索する試みとしてスタートするものです。

（本学部准教授・政策分析論）

新入生・在学生の皆さんへ

学部長　小針　司

二〇一一（平成二三）年三月一一日、百年、否千年に一度ともいわれる大震災に見舞われました。

新入生・在学生の皆さんはいかがでしたか。心からお見舞い申し上げます。私はしばし呆然の日々でした。ところが、学部の教員たちはいち早く動き始め、在学生の安否確認に着手しました。在学生全員の安否確認が済んだのは三月一八日のことでした。続いて、生活状況の確認に移り、その時点で震災の影響を受けた学生は二〇人を超えていました。新入生に対しても同様の対応をとり、数人を除いて、安否確認は四月上旬には完了し、四月一八日の入学生歓迎会には全員の無事が確認できたのです。

他方、三〇人超の学生が甚大な被害に遭いました。そこで、被災学生のため救済基金を立ち上げ、ただ今支援を実施中です。

また、岩手に希望を取り戻すため、防災と復興の学部プロジェクト研究を企画・実施しつつあります。ふるさと岩手に光あれ！これが、私の祈りです

日　程	震災に伴う予定変更など
3月11日(金)	震災発生
3月22日(火)	学位伝達式(大学共通講義棟)
3月26日(土)	後期日程合格発表(入試中止)
4月18日(月)	新入生を歓迎する会(大学講堂)
4月18日(月)～20日(水)	ガイダンス等
4月22日(金)	前期授業開始
8月10日(水)	前期授業終了

岩手の地形②

花崗岩の街　盛岡

吉木　岳哉

盛岡を代表する観光名所に、盛岡城跡（岩手公園）がある。その一角を占める桜山神社の裏手には、注連縄（しめなわ）が掛けられた高さ５m以上の堂々とした巨岩が鎮座している。この神社の御神体「烏帽子岩」である。城跡内の石垣の切れた部分にも、巨大な岩石が露出している場所がある。これらの巨岩、そして城を取り囲む石垣の岩は、すべて花崗岩（かこうがん）という岩石である。

花崗岩は地下深部で作られた硬い岩石で、御影石（みかげいし）とも呼ばれる。最近の墓石の多くは御影石なので、誰でも見たことがあるはずである。盛岡城で見られた花崗岩は、その形成時期がはるか白亜紀にまで遡る。盛岡の街を歩いていると、この花崗岩からなる巨岩をあちこちで目にすることができる。

たとえば、烏帽子岩から徒歩５分ほどの場所にある「石割桜」も、桜の土台をなす巨岩は花崗岩である。また、

桜山神社の烏帽子岩

岩手の地名の由来となった「岩に残された鬼の手形」で有名な三ツ石神社の「三ツ石」も花崗岩であるし、盛岡天満宮の「弁慶石」や「銭湧石（せんゆうせき）」も花崗岩である。中津川沿いを歩いても、河原の石の隙間から、巨大な花崗岩があちらこちらで頭を覗かせているのを見つけることができる。

三ツ石神社の三ツ石

鉱山都市などの特殊な場合を除くと、都市は平野に立地することが一般的である。日本の平野の多くは、河川によって運ばれた土砂が堆積した沖積平野である。そのため、沖積平野に立地する都市の地盤は軟弱である。また、たとえば仙台中心部のように、沖積平野ではなく、地質学的に比較的新しい時代の軟らかい岩石の上に立地する都市もある。これは沖積平野よりは硬い地盤であるが、ハンマーで叩けば容易に割れる程度の硬さである。そのため風化しやすく、街なかに巨岩が露出することはない。

河川が運べない大きさの巨岩が街のあちこちに点在することは、地下の浅いところに硬い岩盤が存在することを意味している。つまり、盛岡の街は非常に堅固な花崗岩の上に立地している。そもそも、街のあちこちで巨岩を見られること自体が、県庁所在地級の大都市としては珍しい。

鬼が手形を残さなかったとしても、この地は「岩手」という名にふさわしい地形的特徴を有している。

（本学部准教授・自然地理学）

●編集後記

▼今回の震災で、被災地以外の人は自粛をせず日常どおりの生活に心がけることがいかに大切か、改めて分かりました。各人がそれぞれできることで、協力していければと思います（余）▼沿岸部で被害に遭われた方々の大変さや心痛は計り知れない。自分も含めて岩手県民、少しくらい不便でも、我慢、我慢（T.Y.）▼学部HPには緊急時対応ということで様々な情報を掲載してまいりました。これからも随時、必要な情報発信を続けたいと思います（丸丸虫）▼花が一斉に咲き始めた。学びの場がより豊かになるよう、学生の皆さんの率直かつ前向きな意見を生かしていきたい。皆さんの人生の花が美しく開くことを祈りながら（V）▼学生とともに授業・カリキュラムについて議論するなんて、かつてあっただろうか。非常に良いことだと思う。いろいろ発言してくれた学生に感謝（TKO）▼今回の発行をどのようにするのか、ずいぶん迷いました。皆さんのお手元に届く時期を遅らせることになってしまいましたが、いつもどおりのMONTOをお届けいたします（なっ）

●編集スタッフ＝金子与止男（編集責任者）・山本健・高嶋裕一・山田佳奈・桒田但馬・島田直明

●写真協力＝見市建・小井田伸雄・宇佐美誠史

●記事中の職位・学年は二〇一一年三月現在のものです。

●ご意見をお待ちしています

MONTOへのご意見・ご感想・ご要望は、氏名、住所、電話番号を明記のうえ「総合政策学部広報・交流委員会」宛に、下記連絡先まで。電子メール送付（monto_poly@ml.iwate-pu.ac.jp）でも構いません。よろしくお願いいたします。

MONTO

●【MONTO】岩手県立大学総合政策学部ニュース　Iwate Prefectural University
●第25号：2011年（平成23年）４月６日●発行：公立大学法人岩手県立大学総合政策学部
〒020-0193 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字巣子152-52
代表TEL019-694-2000　学部019-694-2700　FAX019-694-2701（学部事務室）
印刷／株式会社杜陵印刷　TEL019-641-8000

《MONTO WEB版》URL
http://www-poly.iwate-pu.ac.jp/monto/index_monto.html
＊岩手県立大学のホームページ　http://www.iwate-pu.ac.jp/ から総合政策学部をクリックして、次に「学部機関紙MONTO」をクリックしてもアクセスできます。